創成期の童謡とその音階についての一考察

A Study of the Scales in the Early Stage of Children Songs

（2005年３月31日受理）

松　井　み　さ
Misa　Matsui

Key words：童謡，陽旋法，陰旋法，ヨナ抜き音階

要　　旨

童謡は大正時代に，当時の詩人や作曲家によって誕生した。創成期の童謡は，その多くの曲が，江戸時代から日本に伝わる「旋法」と，明治時代西洋から入ってきた「西洋音階」を融合させた音階によって作曲された。それらは「ヨナ抜き音階」などと呼ばれた，「ヨナ抜き音階」や，それ以外の旋法と西洋音階の融合て作曲された多くの童謡は，我々日本人に広く親しまれた。そしてその音階は童謡のみならず，色々なジャンルの音楽に使用され，現代まで伝えられている。

は　じ　め　に

一口に童謡といってもその種類は色々ある。我々の祖父・祖母の時代から受け継がれている曲もそうであるし，現在放送しているテレビ番組から生まれた曲の中にも童謡と呼ばれている曲がある。本編では，童謡の創成期である大正時代から昭和初期の作品を主に，曲を構成している音階に焦点を当てる。そして，日本古来の「旋法」と，明治時代日本に入った「西洋音階」が，創成期の童謡にどのように関連しているかを考察する。

童謡の誕生について

始めに，「童謡」とは，どういう経緯で生まれたのだろうか。

「童謡」とは，大正時代，少年少女向けの雑誌「赤い鳥」「金の船」などに載った詩に，当時の作曲家が，曲をつけ，発表したのが始まりと言われている。いっぽう，童謡によく対応して言われるのが，「唱歌」である。唱歌とは，明治12年頃，伊澤修二が音楽教育振興のため，「音楽取調掛」を設置した。そして，「文部省唱歌」の制定を行った。「童謡」は当時の「文部省唱歌」に疑問を持った人たちが，唱歌に対抗して作ったものである。

では，「唱歌」の何に対抗したのか，創成期の「童謡」と「唱歌」の主な相違点を考えてみる。

まず，唱歌は　詩の内容が，とても，教育的で訓示的である。「一月一日」とか，「日の丸」「村の鍛冶屋」などがそれにあたる。また，学校で教えたことから，知識を与える，という目的を持っており，物語を題材とする場合，そのすべてを歌詞に盛り込もうとしている。「桃太郎」「浦島太郎」「牛若丸」などがこれに相当する。詩というよりも，あらすじの説明のようになってしまい，いわゆる詩情のようなものはほとんどない。もちろん，自然や生活を題材にした詩もある。しかし，そこに書かれた世界は，あくまで明るく，健康的な世界である。「冬の夜」などがそれにあたる。そして，文部省唱歌は西洋の音楽を積極的に取り入れる，という目的のもと，外国の曲を多く制定している。これは，輸入型唱歌と言われている。例えば，「むすんでひらいて」はフランスのジャン＝ジャック＝ルソーの作曲，「蛍の光」はスコッ

トランド民謡である。

いっぽう，創成期の童謡は，多くの曲が，江戸時代，わらべ歌などに使われていた日本音階である陽旋法，陰旋法を利用して作曲されている。また，唱歌に比べると，短調の曲が多く作曲されている。音階については，この後，詳しく述べることにする。また，童謡は，自然や風景など，生活に密着した事柄を題材にしたものが多い。そして，そのような童謡誕生の中心となったのが，作曲家の本居長世である。

童謡誕生時の詩人・作曲家たち

本居長世（1885～1945）は，江戸時代の国学者　本居宣長の子孫にあたる。東京音楽学校を卒業後，同校で教鞭をとった。代表作に「十五夜お月さん」（大正９年）「赤い靴」（大正10年）などがある。このほか，童謡の創成期の主な作曲家としては，山田耕筰（1886～1965），成田為三（1893～1945）などがいる。山田耕筰は，「からたちの花」（大正12年）「赤とんぼ」（大正10年）など，成田為三は，「かなりや」（大正７年）「雨」（大正８年）などの作曲をしている。

また，「赤い鳥」「金の船」などの少女雑誌に詩を載せていた詩人には，野口雨情（1882～1945），北原白秋（1885～1942），西条八十（1892～1970）などがいる。野口雨情は「シャボン玉」（大正11年）「十五夜お月さん」（大正９年）「七つの子」（大正10年）北原白秋は「この道」（昭和元年）「からたちの花」（大正12年）西条八十は「かなりや」（大正７年）「肩たたき」（大正12年）などが代表作である。

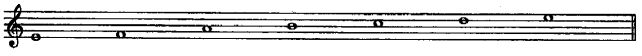
音階について

それではここで，創成期の童謡の音階について，詳しく考察する。江戸時代，広く親しまれていた「わらべうた」は，ほとんどが日本音階の「陽旋法」または，「陰旋法」で作曲されている。【図１】「陽旋法」はｄ・ｅ・ｇ・ａ．ｃ・(ｄ)の５音でできている。主音，つまり，音階の中心になる音はｄ音である。我々のよく知っている歌でいうと「かごめかごめ」が陽旋法で作曲されている。いっぽう「陰旋法」はｅ・ｆ・ａ・ｈ・(ｃ)・ｄ・(ｅ)の５音でできている。括弧内のcの音は，下降形のときに，d音のかわりに使う音である。「通りゃんせ」などが陰旋法で作曲されている。【図２】

【図１】

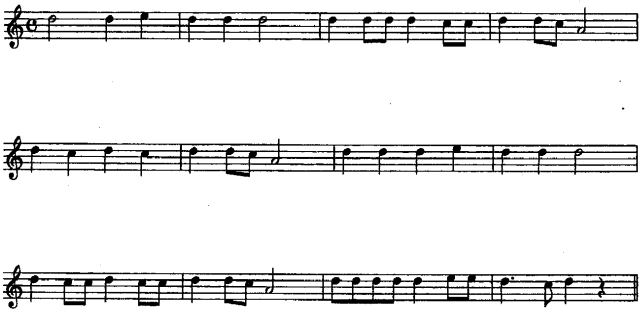
陽旋法

陰旋法

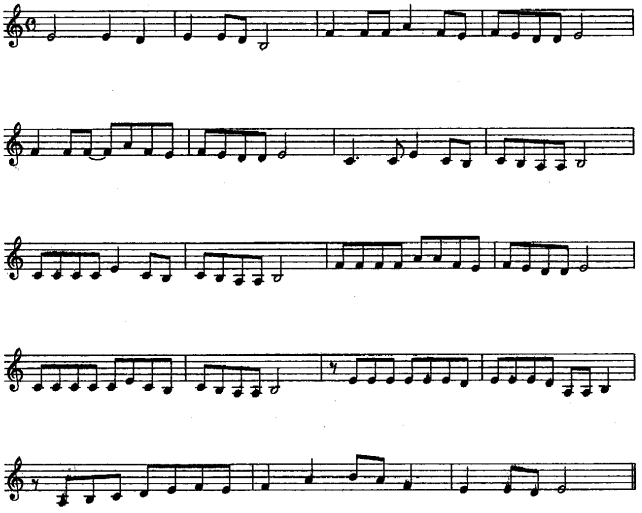


【図２】

かごめかごめ



通りゃんせ



さて，明治になり，西洋音階，いわゆる長音階や短音階が日本に入ってきた。長音階は衆知の通りｃ・ｄ・ｅ・ｆ・ｇ・ａ・ｈ・(ｃ)である。ここで，今まで，日本人が親しんできた「陽旋法」と西洋から入ってきた「長音階」が融合する。つまり，陽旋法の５音でできていて，主音は長音階の主音であるｃの音から成っている音階である。ｃ・ｄ・ｅ・ｇ・ａ・(ｃ)となる。これは，当時，ｃ・ｄ・ｅ・ｆ・ｇ・ａ・ｈのことをヒ・フ・ミ・ヨ・イ・ム・ナと呼んでいたことから，ヨナ抜き音階と呼ばれた。【図３】

【図３】

ヨナ抜き音階

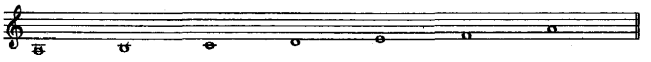
このヨナ抜き音階は，当時の日本人にとって大変馴染みやすい音階であったことから，この頃作曲された多くの曲に使用されている。また，童謡だけでなく，唱歌にも多く取り入れられている。例をあげると，「チューリップ」(昭和７年　近藤宮子：詩　井上武士：曲)，「日の丸」(明治44年　高野辰之：詩　岡野貞一：曲)，「ゆりかごの歌」(大正11年　北原白秋：詩　草川信：曲）などである。また，スコットランド民謡の「故郷の空」も１カ所をのぞいてヨナ抜き音階で作曲されている。この曲が，いろいろな替え歌となって広く親しまれている理由の一つに，この曲の音階があると考える。

さらに，現代においても演歌を中心に，このヨナ抜き音階で作曲された曲は広く親しまれている。「函館の女」(昭和40年　星野哲郎：詩　島津伸男：曲）は階名で歌ってみれば分かるように，最後まで，f音とh音がでてこない完全なヨナ抜き音階で作曲されている。また，さらに新しい作品では，「箱根八里の半次郎」(平成12年　松井由利夫：詩　水森英夫：曲）もヨナ抜き音階で作曲されている。これらの曲が多くの日本人に愛され，歌われたのは，その音階が馴染みやすいものだったからだと考えられる。

ただ，創成期の童謡が，すべてヨナ抜き音階で作曲されているわけではない。「七つの子」(大正10年　野口雨情：詩　本居長世：曲）のように第４音を含む音階で作曲されているものや，「俵はごろごろ」(大正14年　野口雨情：詩　本居長世：曲）のように旋法の影響が色濃く残っているものなどもある。しかしヨナ抜き音階で作曲された曲が多いのは事実である。

ヨナ抜き音階は陽旋法と長音階が融合されてできた音階であるが，童謡には，陰旋法と短音階を融合させて出来た音階も多用されている。具体的に言うと，「陽音階」と長音階を融合させた方法を，「陰音階」と短音階でも同じようにすることである。つまり，ｅ・ｆ・ａ・ｈ・(ｃ)・ｄ・ｅを短音階の主音であるａ音から始める。そうすると，ａ・ｈ・(ｃ)・ｄ・ｅ・ｆ・ａになる。【図４】

【図４】



この音階で作曲された曲には，「黄金虫」(大正11年　野口雨情：詩　中山晋平：曲）や「月の砂漠」(大正12年　加藤まさを：詩　佐々木すぐる：曲）などがある。さらに，この音階の第４音であるｄ音を抜いたａ・ｈ・ｃ・ｅ・ｆ・ａで作曲された曲には「花嫁人形」(大正12年　蕗谷虹児：詩　杉山長谷夫：曲)「うれしいひなまつり」(一部，ｄ音を使用）（昭和11年　サトウ・ハチロー：詩　河村光陽：曲）などがある。この音階は，短調の第４音と第７音がない，つまり短調のヨナ抜き音階になっている。【図５】

【図５】

短調のヨナ抜き音階

先に述べたように，この時代の童謡はヨナ抜き音階で作曲された曲が多くある。しかし，必ずしも長調の主音であるｃ音で終わるとは限らなかった。平行調の主音であるａ音で終わることもある。これを筆者は「短調化された陽旋法」と呼ぶことにする。【図６】ヨナ抜き音階なのに，ａ音で終わる曲の例としては，「砂山」(大正11年　北原白秋：詩　中山晋平：作曲)，「叱られて」(大正９年　清水かつら：詩　弘田龍太郎：曲）などがある。

この2曲はいずれも曲頭は長調の感じを顕しているが，曲の終わりはa音で終わっている。

【図6】

短調化された陽旋法

ま と め

本編では主に創成期の童謡に多く使用された音階について述べた。「ヨナ抜き音階」や「短調化された陽旋法」は近代化の波のもと，当時の童謡や唱歌から生まれ，現代につながる音階としていろいろなジャンルの音楽に使用されている。一方，童謡と呼ばれる曲は現在でも数多く作曲されている。現在は，単に子どものための曲としてではなく，世代を超えて多くの人に歌われている曲という考えに変わってきているようだ。使われている音階も，曲想も多様化しているように感じられる。童謡の今を享受しつつ，今後を見守りたい。

参考・引用文献

童謡　心に残る歌とその時代　海沼　実　NHK出版　2003
唱歌・童謡ものがたり　読売新聞文化部　1999
童謡でてこい　阪田　寛夫　河出書房　1986
案外，知らずに歌っていた童謡の謎　合田　道人　2002
日本のうた　第1集　第2集　野ばら社　1998